



現代人形研通信

11号 2025年8月発行

メールマガジンをお送りしているアドレスは送信専用です。事務局へのご連絡は member.gendainingyo@gmail.com へお送りください。

contents

- ・現代人形研からのお知らせ
 - ・インフォメーション

- ・公募展 審査員に聞く 長尾千斗

- ・展覧会レポート

ひとがた通信展「ドールという変移する記号4」
AiDocka 第5回創作人形展

- ・私の取り組み

UNIVERSAL POOYAN 村井 芳典



現代人形研からのお知らせ

「人形研展」 募集が始まりました

当会が初めて主催する全国公募展「人形研展」は、会場の東京都美術館にとっても初の人形専門の公募展です。

8月13日より応募受付を開始しており、既に申込みを完了された方もいます。

〆切の10月13日まで時間がありますので、当会の会員で制作をされる方は出品料割引がありますので、ぜひ果敢に挑戦なさってください。申込みには①基本情報（フォームまたは郵送）②画像③出品料、の①～③すべての提出・納入で申込みが完了します。

詳細は皆様にお送りした「募集要項」をご参照ください。ウェブサイトでも同じ内容を確認できます。（申込みフォームへのリンクあり） <https://www.gendainingyo.com/koubo>

※ボランティア協力をお願い

大きな会場での展示で、多くの方のお手伝いを必要としています。引き続き、お手伝いのお申し出をお待ちしております。

【要項配布】 ご協力いただける方は部数を事務局までお知らせ下さい。事務局から直接相手先に発送もできますので、それをご希望される方は宛先と部数をお知らせください。

【展示スタッフ】

「搬入（12/12・金）、搬出（12/20・土）のお手伝い」「会場受付・監視など（12/13～12/20 *12/15休館日）」のお手伝いを募集します。

スタッフに登録できる方は、下記までご一報ください。

メール member.gendainingyo@gmail.com 電話 042-395-7547

第2回総会の案内（正会員対象）

第2回総会開催日と会場 8月30日（土）午前 会場 日比谷図書文化館 セミナールームA

詳細を郵送でお送りしました。議決後に「令和6年度事業報告書 活動計算書」は東京都に提出され、東京都生活文化局のNPO法人ポータルサイトで公開閲覧できるようになります。

令和7年度（7月1日）現在の会員数

正会員（団体は1ユニットを1人扱い）：46

賛助会員（同上）：62

【ご連絡】 更新会費納入〆切の7月26日時点で会費未納入の方

当会定款により1年以上会費を滞納した方は会員資格を喪失します。会費を納入された方にはすべて会費受領のご連絡を送っております。納入したかお心あたりがない方は、お調べしますので member.gendainingyo@gmail.com までご連絡ください。

勉強会のお知らせ

読書会『今日の人形』を読む

『今日の人形』（昭和34年 日本経済新聞社発行 編者 近代人形美術会）は、今の私たちにも共通する問題提起があり、この書を通して現代の人形を見直してみたいと思います。参加者による発表もあります。現在、8名の参加者で読み進めています。関心がある方はお気軽に下記までご連絡ください。

進行役 榊山裕子

第3回 9月18日（木）20:00～22:00

第4回 10月16日（木）20:00～22:00

※毎月ZOOMにて開催予定です。

会費 無料

用意するもの 特になし 『今日の人形』をもし入手できればお勧めします。古書なので、できない方は毎回扱うページのPDFを閲覧できるようにします。

参加資格 当会の賛助会員・正会員 ZOOMに接続できること

申込み方法 下記まで

メール member.gendainingyo@gmail.com までお申込ください。ZOOMの招待メールを送ります。

前日まで受け付けますが、勉強会で読むページは事前に読むようにしておいてください。

※『今日の人形』の価格は1000～3000円台で古書店で扱われています。

参考 「日本の古本屋」サイト <https://www.kosho.or.jp/>

※途中から参加ご希望の方には過去録画のURLをお送りします。

年会誌 正会員のお名前記載について

秋に今までの通信をまとめた年会誌を発行いたします。第1号は、令和6年度（2024年7月～2025年6月）が対象です。年会誌には正会員のお名前を掲載させていただきます。「無記載」「届け出のお名前から掲載名を変更」をご希望の方は、member.gendainingyo@gmail.com までご連絡ください。9月30日まで受付いたします。

※年会誌は正会員に無料配布いたします。

賛助会員の方は有償でご購入いただきます。価格や入手方法の詳細情報は次号でご案内の予定です。

編集委員募集

当編集委員会では、編集委員を募集しています。賛助会員、正会員のどちらでも、通信の編集に関心のある方はお申し出ください。原稿依頼、整理、デザイン、企画など、できる時間・範囲で関わっていただければ助かります。

条件 メールで連絡のやりとりができる方

関心のある方は事務局まで、ご一報ください。

インフォメーション

展覧会情報

人形彫刻 戸田和子展 神秘の森の精霊たち

4月26日～11月10日 9:00-17:00 水曜休館（祝日の場合は翌日）
妖精美術館 福島県大沼郡金山町大字大栗山字狐穴 2765
TEL 0241-55-3180 入館料/大人（高校生以上）300円、小中学生 200円

MISOROGI 人形展

8月27日（水）～9月2日（火） 9:00～21:00（最終日は15:00閉場） 入場無料
丸善・丸の内本店 4F ギャラリー A TEL 03-5288-8881
主催 羽関オフィス URL <https://misorogi2025.nonc.jp/>

木曜日に人形は夢をみる

DOLL SPACE PYGMALION 有志 + ゲスト作家による創作人形展
9月4日（木）～9月8日（月）
11:00～18:00（最終日16:00迄）
STAGE 悠 1F
東京都目黒区自由が丘 1-23-16
URL <https://stage-yu.com/exhibition/>

西村 FELIZ 人形展 12YEARS

10月13日（月）～23日（木） 11:00～18:30（最終日17:30迄）
ストライプハウスギャラリー
東京都港区六本木 5-10-33-3F
TEL 03-3405-8108
作家 URL <https://www.feliz-nishimura.com/>



MISOROGI 人形展



人形研展 審査員に聞く

長尾千斗さん

(横浜美術大学非常勤講師 元横浜人形の家 企画スタッフ)

インタビュー 羽関チエコ



長尾千斗 (ながお・ちと)

多摩美術大学映像演劇学科卒。その後文化庁と東京大学のアートマネジメントプロジェクト AMSEA の受講生としてアートマネジメントを学び、2015 年より横浜人形の家にて展示企画として在籍。創作人形やぬいぐるみなど広く人形文化に関する展覧会を多数企画する。

企画した展覧会

2021「アンティークドール×現代創作人形」
2022「中原淳一と人形」展、2023「ALICE × DOLL」、2024「人はなぜ"ひとがた"をつくるのか」展、2025「魔法少女の軌跡」展など。

羽関：今回は審査員を受けていただいてありがとうございました。球体関節人形や、この間の「魔法少女の軌跡」展（注1）の関連で少女の文化の延長としての人形、またジェンダーに関する視点を期待してお願いしましたが、もちろん、それにとらわれずに審査をお願いできればと思っています。

そもその質問ですが、長尾さんのその人形への関心の始まりを教えてくださいませんか？

長尾：私は幼少期は人形遊びをよくやってたんですよ。小学二年生ぐらいの時に祖母と同居するようになりました。祖母の民芸品とともにビニールの人形とか古いアメリカの人形みたいなものがたくさんありました。また、雛人形を出してもらったりした時なども、自分が持っていたリカちゃん人形と対峙させる人形がどんどん増えてきて、そこから自分なりの人形劇みたいなものを自分でやるようになりました。人形を自分で動かすという、そして物語を作るみたいなところから、（人形との関わりが）どんどん発展していったような気がします。

小学校でもクラスのチームで、私が劇の物語を書いて、みんなでそれを芝居することになったんですが、みんなにぬいぐるみとか人形を持ってきてもらって…。学校では得意なことはあまりなかったんですけど、これは発表の時に先生に褒められた。それもあまり打ちとけることができない先生から、「すごく良かったよ」って言ってもらったんです。それが、結構自分の中の成功体験となって。そこから自分で人形を作って動かしてみたい気持ちが芽生えて、高校は映像学科に進み、人形アニメーションを作るに至るという感じでした。人形そのものというよりも人形と人形の関係性みたいなもの、一体増えるとまた全然違うお話が広がっていく、シチュエーションが変わってくるとか、そういうのがすごく面白いと感じていました。

羽関：今はアニメーションを作っていないんですか？

長尾：今はちょっともう全然手が止まっちゃってるんですけど、一緒にやらないかって言ってくれるアーティストや歌手の方とかがいるので、またやりたいなっていう気持ちはあります。

羽関：人形展のキュレーターをされてきて、特に関心がある分野ってありますか？

長尾：以前、トークショー（注2）の時、ミルキィ（イソベ）さんが、インスタレーションの話をしていたと思うんですが、人形で自分も好きだと感じていたところは、ポージングや周りの情景を変えたら全く違う世界が見えてくるところです。また、「魔法少女」（注1）の展示に出展していただいた吉田良さんの人形の二重関節の動きが複雑なニュアンスを出すのを見て、それまでは人形を表面的に見ていたのが、動きについても考えたりするなんていう余裕ができたようになった感覚があります。

羽関：展示の仕事をされるようになってちょっと見方が少し変化が出てきたって感じですか。

長尾：そうですね。たとえばビスクドールを見るときは、土に熱のエネルギーが加わって作り出される時間の経過を思うといったような、人形を多層的に捉えることができるようになったと思います。

羽関：これから人形に関してもたれているご自身のテーマはありますか？

長尾：あの、正直なこと言うと、自分の中に人形じゃなきゃいけないみたいなこだわりはあまり思っていないんです。でもやっぱり人形表現、人形を扱うこと、扱っている人に、やっぱり興味はあります。

ドイツの表現主義の時代の女性たちが戦略的に人形を使っていたのかどうか、ということがすごく気になってます。私が読んだアートの歴史の文脈紹介の中の説明（注3）だと、なんかすごくモヤモヤする文章だったんですね。やっぱり男性の方が強いような印象があって…。ココシュカについても、人形を用いた表現について十分に説明されてなかったりしたので、他の文献も調べてみたいと思います。人形を使う意図みたいなのが時代によっていろいろあると思うんです。ドイツのすごく非常に困難な時期の表現というものが、今後日本の参考になっていくんじゃないかなっていう気がしています。

羽関：公募展では何かちょっと注目したいポイントとかありますか？

長尾：審査員の方々が、バラエティ豊かとか面白い方ばかりなので、どういった方が応募してくるのかなってというのがすごく楽しみです。今まで見たような感じじゃない展開がありそうなワクワク感がすごくあります。

羽関：ありがとうございます。本当に人形はもともと自由なものですから。いわゆる承認欲求のためのコンテストにはしたくないなと思ってます。人形者の集まり、人形祭りみたいなイメージです。審査はよろしく願いいたします。

長尾：よろしく願いいたします。

注1 「魔法少女の軌跡」展 横浜人形の家 2025年4月5日～6月29日 「魔法少女」をテーマに過去60年にわたりアニメや玩具、フィギュア、創作人形を展示。創作人形では吉田良、恋月姫、秋山まほこ、陽月、坂東可菜が出品。長尾千斗が企画担当。

注2 土井典追悼 トークショー&舞踏公演 “人形を語る—『夜想』と『DOLL FORUM JAPAN』” 2024年6月22日 横浜人形の家4階 あかいくつ劇場 出演 ミルキィ・イソベ／羽関チエコ／榊山裕子

注3 参照『ART SINCE 1900: 図鑑 1900年以後の芸術』ハル・フォスター ロザリンド・E・クラウス イヴ・アラン・ボワ、ベンジャミン・H・D・ブークロー デイヴィッド・ジョーズリット共著 東京書籍発行

参照部分「これは特にダダに参画した女性芸術家の仕事に顕著だ。チューリヒではゾフィー・トイバーとエミー・ヘニングスがそれぞれマリオネットと操り人形をつくっているが、両名ともステージ上で大いに才能を発揮したし、他方ベルリンではハンナ・ヘーヒも自作の人形と掛け合いを演じてみせた（中略）。3人の女性にとってそうした人形は、役柄を演ずること、女性性を舞台上上げてテストしてみること、女性の欲望そしてまた女性というアイデンティティを探求するための手段であった」（「1925c ダダとバウハウスの人形と操り人形」の章より引用）

展覧会レポート

ひとがた通信展「ドールという変移する記号4」（特別寄稿）

文 一実^{いっみ}（秋保ひとがた文化研究室）

※本稿は会員の一実さんが企画・発行している「ひとがた通信」で既発表の原稿です。ご許可をいただいて転載させていただきます。

1章：はじめに

2020年に「秋保ひとがた文化研究室」という小さな団体を立ち上げた。毎年、仙台市秋保にある佐々木美術館の協力のもと「ひとがた通信展」という展覧会を開催している。

これは、宮城県内の作家を中心に多角的に「ひとがた」や「人形」について思考する展覧会であり、昨年で4度目の開催となった。本展覧会を企画した背景には、東北、とりわけ宮城県における創作人形をめぐる状況があった。創作人形の教室はここ十年ほどで数を減らし、今日、県内で人形の実物を鑑賞できる機会は極めて稀だ。この状況は、作り手と鑑賞者の双方にとって、現代創作人形の動向に触れる機会の喪失を意味する。その中で現代の「創作人形」に触れる貴重な機会を作ろうと思案したのがこの展覧会である。

創作の世界において、その文化醸成の土壌は、鑑賞機会の豊富さに大きく依存すると私は考えている。地方の場合、創作人形の鑑賞機会は極めて限られているのが現状だ。その為、実物との対話は、首都圏へ「遠征」するか、もしくは通販などで購入する他ない。時間的・経済的に余裕のない作り手は、これらの行為はさらに乏しくなるだろう。そんな実物との対話が困難である時、私たちは必然的にインターネットや書籍に掲載された「画像」を参照するようになる。もちろん、都心の作り手も同じことを行うだろうが、地方よりも実物を確認し「対照する」機会の多さは決定的に違う。その絶対的な参照点の手が届く場所にあるか否かの影響力は、かなり大きい。そして、この参照点の不在が、東北の作り手に特有の創造を強めている。

第2章：答え合わせの無い土地で

現在の東北で作られる創作人形の皮膚の大半は、「想像」で作られているといっても過言ではない。実物鑑賞の機会が乏しい環境下で、このような作り手たちは、二次元の画像情報から三次元の「皮膚」を立ち上げるという、特異な創造のプロセスを強いられているとも言える。

これは、単なる模倣ではなく、高度な「翻訳」作業であるのかもしれない。例えば、実物のビスクドールが持つ磁器の肌艶を知らない学生が、その「透明感」を表現するために、自身のメイクの知識から類推して『ラメのをせる』という発想に至る。ここでは、参照すべき正解の不在が、かえって他の美意識を大胆に接続させている。

このプロセスから生まれるものは、「想像の皮膚」と呼ぶべき独自性を帯びる。そこには、絵画的な筆致やアニメなどにおけるキャラクターの肌の質感など、異分野からの影響が色濃く反映されることがある。それは、物理的な人形の「写し」ではなく多様な視覚情報が作り手の内で過され、再結晶したイメージの産物である。そして、「学校」や「教室」あるいは小規模な「展示」といったコミュニティの中で、その表現は共有・洗練され、新たな様式として拡散されていく。こうした「想像の皮膚」を追求する作家たちの異なるアプローチに、光を当てたいと考えたのが本展だ。その行為は、「東北という土地の風土」や「作家個々の内面」と深く結びついたマチエールの探求といえる。

第3章：それぞれの答え合わせ

ここからは、展覧会を通して出会った作家とその作品について紹介していく。本展では、大きく分けて二つの潮流が見られた。一つは、東北の風土と深く結びついた「土地の記憶を纏う皮膚」。そしてもう一つは、常に更新を続ける「現代の皮膚」である。さくまいずみは、自然から採取した材木や植物を用いて制作を行う。今展の作品では、地元である遠刈田の土を自ら捏ね、素材とした。つだかおりも、東北の自然から得た素材を使い、張子技法を取り入れて制作を行う。このアプローチは、人形の皮膚を

観念的な追求から解放し、それらに土地の記憶や風土を宿す。また、菊地市千(きくちいち)は、陶芸という手法で土という物質に向き合い制作を行う。それらの人形の皮膚は、焼成過程での意図せぬ表情を見せる。これらの手つきを観ることで「観念的な美しさの追求からの解放」が「物質との対話」を通じてのみなされるものと、改めて実感できるだろう。それらは、鑑賞空間で、写真や画像からは決して伝わることのないリアリティを体感させてくれた。



さくまいずみ



菊地市千



つだかおり

「ひとがた通信展」は、立体作品だけでなく絵画作品などが加わっていることで、二次元と三次元それぞれのひとがた表現を比較することができる。それによって、作家が追い求める「皮膚」のありようを観察することができる。前述の通り、「想像の皮膚」は絵画的な筆致や、アニメなどにおけるキャラクターの肌の質感など、異分野からの影響が色濃く反映されることがある。それらを踏まえて鑑賞することで、地方に引き起こされている「現代の皮膚」の感触を体感できるのではないだろうか。

清水だいきちは、球体関節人形をメインとし、キャラクタードールのような作品を制作する。それらは、パステルを何層にも丹念に重ねることで、人間の肌が持つ血の通った深みを追求している。

柗ノ夜も、球体関節の制作を行う作家だが、別のアプローチで人間のリアリティを探求する。その作品は、油彩を用いることで、艶のある皮膚が描き出される。



清水だいきち

山脈は、初期から比較的大きな人形を制作する作家であったが、昨今は頭部のみの作品に注力している。削ぎ落とされた対象を扱うことで、塗料の素材そのものの活用に強度が増し、崇高な滑らかさを持つ皮膚が形成された。

笹笹（こきょう）は、手のひらに収まる作品を多く制作する作家であるが、昨今では実際の赤子をモデルにした作品も出展している。それらは、素朴で、触れたいくなるような柔らかな皮膚の質感が印象的であった。



笹笹



一実



柊ノ夜



山脈

私も同じく宮城県の仙台で育ち「想像の皮膚」を練りあげる必要のあった当事者の一人だ。それゆえに、出展された作品たちの皮膚に焦点を当てた時、そこに作家の想像力が体現されていることに気が付く。

そして、当展覧会で私は、2つの新作を出展した。一つは、心象風景を纏った胸像である。これは対峙者と共鳴する温かな皮膚を持たせるよう制作した。一方、対比として制作したのが球体関節人形の構造を持ちながらも未完成なオブジェとしてのひとがたであった。これは生身の人間はオブジェ化されるべきではないという個人的な思慮の上、性別を持たない身体に無機質な肌という組み合わせを考えた。

これは、歴史的に「人形」が纏ってきた固定的な「女性性」の記号を解体しようとした自身の試みである。それぞれ2点の作品ともに、情報と物質の狭間で格闘しながら「人間と人形」とは何かを思考し続けた現在の私なりの答えだった。

第4章：おわりに

自身の試みを含め、作家それぞれの『想像の皮膚』は、模範のない情報環境と自然風土が宿る土地で、作家たちが生み出した特有の答えだ。

展覧会は、こうした多様な「皮膚」が出会い、共鳴する場となる。それが、作り手と鑑賞者の双方にとって、新たな視点の発見の機会となれば、企画者として嬉しく思う。

日々、社会や人々によって、人形が纏うその意味はその土地で変化し続ける。それらを絶えず発信していくことで、この土地の文化をさらに豊かにしていく一助となることを願っている。

ひとがた通信展「ドールという変移する記号4」

2024年11/20(水)～12/22(日) 秋保の杜 佐々木美術館&人形館 本館展示室a

出品 川村千紘 菊池市千 笹笹 さくまいずみ 山脈 清水だいきち せん タカハシユウコ つだかおり 柊ノ夜 ほんだあい

AiDocka 第5回創作人形展

6月17日～22日 ギャラリー大通美術館 A室

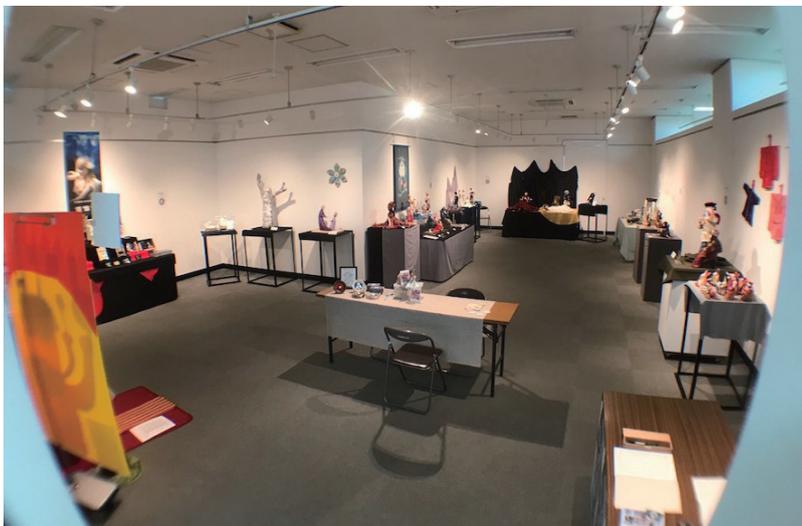
レポート AiDocka 代表 皆川優子

北海道創作人形作家グループ AiDocka は、2014年の設立以来5回目の記念となる展示を6月に札幌で開催しました。道東での孤独な制作の中で仲間を求めた9名によるグループ展で、固定ポーズ人形や球体関節人形など約100点を展示しました。共通の師匠はいないので、素材も石粉粘土、羊毛フェルト、レジンキャストと様々です。手作りのミニチュアの椅子や家具、小さな人形が被る帽子なども展示しました。

会場はギャラリー大通り美術館で、絵画・版画・彫塑・陶芸・手芸などの作品展示のほか各種催しにも使えるように開設された多目的ホールです。私たちの会期中は想像を超える来場者で賑わいました。人形が観る方の心に届く瞬間を目の当たりにする事は作家としてこの上ない幸せです。

また私の師匠は「皆ライバル」と言ったのですが、その言葉とは裏腹に道内各地で活動するメンバーが集まって人形談義に花を咲かせたことで、次回の制作への新たな活力も生まれました。個人的な活動には課題も多々ありますが、これからも仲間との絆を大切に、互いに励まし合いながら創作人形の道を歩み続けたいと思います。次回のグループ展は2027年に開催予定です。

出品：大山雅文 川辺純子 ささきあきこ Riri Sasaki 鈴木千鶴子 千葉康晴 土屋さつき 成瀬麻里子 Minagawa Dolls 皆川優子



会場全体風景



成瀬麻里子



土屋さつき



Minagawa Dolls 皆川優子



千葉康晴さんの展示ブースで撮影した大山雅文さんと筆者。このブース面白くて人気でして自然とはしゃぎたくなります。

私の取り組み

魅力的な人形を作りたい

UNIVERSAL POOYAN 村井 芳典

出来上がった人形を見る。
自分に出来ることと、出来ないこと。
自分が本当に作りたいものは・・・

どんな人形をつくろうかなど構想を練っている時が一番楽しい。
今度はこんなことしようなどと考えていても、いざ取りかかり、実際に手を動かさしはじめると、だんだんと、出来ること、出来ないことがのしかかってくる。特に顔は、ああしたいこうしたいという願望が強くなるから迷いも出てくる。
そこで、うちの作り方として、顔は2、3個同時進行で作っていく。こっちはこうしよう、あっちはこうしよう、とやりたいことをぶつけていって、最終的に出来ることとやりたいことの折り合いをつけるようになっていくと、未熟さを思い知らされる。

結局、いつの間にか、理想と現実の折り合いをつけるような作り方になっていることに気が付いた。情熱が薄れている。もっと、情熱をぶつけるように作っていたと思う。以前より左右対称が気になってるのだろうか、本当は左右の差なんてきちんと対称にする必要はないと思っていたのに。それが自然だし、味というものだったりするんだと。
だから、直せば直すほど、迷宮入りになる。

実は最近、知り合いの紹介でスピリチュアルな能力を持っているという人に会う機会があった。とても気軽な飲み会で、お話しするという感じの会だった。そういうことは興味があるし、大好きだけど、特にスピリチュアルな能力を信用はしていなかったが、作品の画像を見せたら、とても褒められて嬉しくなってしまうと、人形制作についての今後の向き合い方について、つい相談してしまった。

その人はたくさんの方の相談にのって来たので、一流の創作も見てきたと言う。とても有難いことに、うちの作品は天才的だとも褒めてくれた。観音様像の画像も見てもらった時に「但し、唯一、顔が違う。」と言われて愕然とした。「作品を見るのは普通の人であって、まず顔を見て、すぐ観音様だとわからないものには入っていけない。」と言われた。まず顔を見て観音様だとわかって興味を持てば、それ以外のディテールも見てくれるものだアドバイスしてくれた。

実際、自分もその顔に自信がなかった。観音様の顔だというプレッシャーもあって、迷いを捨てきれず、結局、好きな顔ではなかったの、言い当てられてしまった気分だった。更に、最近作っているものは、過去作を超えていないと感じている。着せ替え人形も作るが、あんな服を着せたいという「わくわく」がない。

やはり、原点回帰だ！
年をとって、集中力もない、目も見えなくなってきたけど、デジタルで補ったり、一生勉強なんだから、インプットも増やして、弱音を吐かずに作っていき！まだ作りたいものはあるんだから。考えていないで、感じて、ひたすら手を動かしていこうと思う！



問題の観音様